

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第999号 平成27年9月15日

フランダースの犬

「フランダースの犬」という作品には、何度泣かされたかわかりません。70歳に近くなった今日においても、この作品を手にとって読めば、自然と涙が流れて仕方ありません。

15歳の主人公「ネロ」に対して、これでもかこれでもかといわんばかりに様々な不幸が襲いかかります。

物語の舞台は、19世紀のベルギー北部フランドル地方の小さな村がモデルとされています。

全ての望みを絶たれた「ネロ」は、アントワープ大聖堂のルーベンスの絵の前で愛犬「パトラッシュ」と共に天国に召されてしまうのですが、その理不尽さに憤りを感じると同時に、「ネロ」が最後に大聖堂の中で一筋の光に浮かび上がった祭壇画を見て自分の願いが果たされ神に感謝するというシーンに、この物語を読む人もまた、心なしか救われる所があるように思います。

この怒りと救いという相矛盾するような感慨は、野坂昭如氏の「火垂るの墓」という作品を読んだ時にも覚えます。

「火垂るの墓」は、戦災で孤児となった兄妹の、栄養失調のために死んで行くまでを描いた短編です。主人公の清太は中学3年生、妹節子は4歳という幼子です。

節子は、8月22日、骨と皮にやせ衰え、物言わず死んでしまいます。清太は、節子を抱いて山に登り、その亡骸を行李に納め、たった一人で茶毘に付します。夜更けに火が燃え尽きた時、周囲には夥しい蛍が飛び交います。それを見て清太は「これやったら節子さびしいやろ。蛍がついてるもん。…蛍と一緒に天国へいき。」と思うのです。その清太も1ヶ月後の同じ日に三宮駅構内で野垂れ死にしているのを発見されます。

「火垂るの墓」は、清太と節子という兄妹の姿を淡々と描く事で、かえって、幼い子ども達を巻き込んだ理不尽さに対する筆者の怒りが伝わって来るように感じます。



「フランダースの犬」という作品は、日本では非常に人気がありますが、ヨーロッパでは必ずしもそうではないようです。その背景には、主人公のネロが「負け犬」のように見えるという事のようにです。彼は、15歳になっているのだから、もっと生きるためにしたたかであるべきだという事でしょう。

そうした見方は分からなくはありませんが、しかし、それは強者の目線ではないように私には感じられます。

評論家の柳田邦男氏は、「フランダースの犬」に関し、「悲しみの復権」と題して次のような一文を書いておられます。

「フランダースの犬」を人生後半になって50年ぶりに読み直したところ、この物語は、ただかわいそうというのではなく、辛い事や悲しいことの多い、ままならない人生をどう受容するか、そんな中であって逆境を恨むのではなく、肯定的な意味をどう見出すかについて考えさせてくれるという読み方も出来る事に気付いた。そして、その事をエッセイに書いたところ、ある児童文学者から、「フランダースの犬」等というセンチメンタリズムに終始した作品を柳田さんが評価し、その作品に新しい意味を見出したと書いてあるのは危ない勧め方だと批判された（同氏著「言葉の力、生きる力」から）。

柳田氏は、児童文学者が「フランダースの犬」という物語をセンチメンタリズムの一語で一刀両断に切り捨てた事に戸惑いを感じたといいます。

私は、他者の苦しみや悲しみに寄り添い、泣けるとするのは素晴らしい事だと思います。ですから、子ども達が「フランダースの犬」を読み、ネロの短い一生を不憫に思い、涙を流すのは自然な心の発露だと思うし、それを感傷的だと批判して「フランダースの犬」は推奨すべきではないというのは、いささか偏狭に過ぎると思います。何故なら、悲しいと感じ、泣けるとするのは、それだけ他者を理解し、共感する力があるという事であり、目の前でどんな悲劇が起ころうとも、無表情で、平然としている事の方が、不気味ではないでしょうか。

柳田氏は、悲しみの感情や涙は、「実は心を耕し、他者への理解を深め、すがすがしく明日を生きるエネルギー源となるものだ」と指摘していますが、私の経験からも、泣く事で前に進めるという事は確かにあると思います。

さて、世の中は、楽しい事、嬉しい事ばかりに囲まれている訳ではありません。むしろ、苦しい事、理不尽な事も沢山あり、そうした中で、多くの方は、懸命に生きるために頑張っています。しかし、人生を振り返れば、どんなに努力しても、旨く行かない、克服出来ないという事はあるものです。それでも、自分らしく生きる事が出来たと思えたら、それはそれで価値ある人生だといえるでしょう。

逆に、厳しい局面に立たされ、何をやっても旨く行かず、社会を恨み、周りの人々を恨み、自分を恨んで死んでしまうというのでは、余りにも不幸というべきではな

いでしょうか。

私は、人が心豊かに生きて行く上で必要な事は、思考の回路が単線であってはならないという事だと思っています。ですから、子ども達には、世の中には、様々な価値観があり、楽しい事も沢山ある一方で、悲しい事もまた同じように沢山ある事を知って欲しいと思いますし、自分の事だけ考えるのではなく、他者の苦しみや悲しみに共感できる力を身に付けて欲しいと願っています。そうでなければ、たとえお金を稼ぎ、出世したとしても、その人の人生は、薄っぺらなものになってしまうだろうと思っています。

柳田氏は、「少年時代に他者の不幸に悲しみを感じ、涙を流すという経験をするのを排除して『明るく、楽しく、強く』という価値観だけを押しつけると、その子の感性も感情生活も乾いたものになってしまう」と述べています。

ネロの背負わされた不幸に対し、可哀そうだと涙したからといって、理不尽さを無条件で受容する事にはなりませんし、自分がネロであったらどうしただろうかと考え、また、ネロを死に追いやった理不尽さに憤り、そのような世の中にしてはならないと考える事とは、矛盾するものではありません。

逆境に立たされた時、人はどう行動するでしょうか。その状況を受容しつつ自分らしく生きるという生き方を選択する人もいれば、敢然と逆境を跳ね返すために戦うという人もいます。

どのような生き方を選択するかは、人それぞれの考え方ですが、他者の苦しみや悲しみに共感出来る力は、その人の考え方の奥行きを広げてくれたに違いないと思います。少なくとも、貴方の心が、他者の苦しみや悲しみを見ても、何の感情も覚え、他人事として関心も持てないような、干からびて乾燥したものでない事を祈ります。

(塾頭 吉田洋一)